

ジャックと豆の木

昔むかし、あるところに、まずしいお母さんが、息子のジャックと任んでいました。お母さんはめ牛を一頭かっていて、毎朝、め牛の出すミルクを市場へ売りにいってくらしていました。

ところがある朝、め牛がミルクを出さなくなっていました。お母さんは、

「ああ、どうしよう。これからどうやってくらしていけばいいんだろう」といいました。

ジャックは、

「くよくよしないで、母さん。ぼくがどこかで仕事をみつけてくるよ」といいました。

お母さんは、

「前にもやってみただけど、だめだったじゃないか。こうなったらもう、め牛を売って商売でも始めるよりほかないよ」といいました。

「わかった、母さん。きょうは市の立つ日だから、すぐにめ牛を売りにいくよ」

ジャックは、め牛をつれて出かけました。

いくらか行かないうちに、なんだかおかしなおじいさんに会いました。

「おはよう、ジャック」

ジャックは、

（どうしてぼくの名前を知ってるんだろう）と思いながら、「おはようございます」とあいさつしました。

「どこへ行くんだね、ジャック」

「このめ牛を市場へ売りに行くんだよ」

「ああ、そうかい。ところで、豆を五つどうやって数えるか分かるかな」

「両手にふたつずつと口にひとつ」と、ジャックはすぐに答えました。

「そのとおり」

おじいさんは、ポケットから、見たことのないきみような豆をいくつか取りだしていいました。

「おまえはなかなかりこうだから、この豆とそのめ牛をとりかえてやってもいいぞ」

「なんだって。ばかばかしい」と、ジャックはいいました。

「ははあ、これがどんな豆か知らんのだね。夜まいとけば、朝にはつるが空までとどいているのさ」

「ほんとう？」

「ほんとうだとも。もしそうならなかったら、め牛は返してやるよ」

ジャックは、

「よし、分かった」といって、め牛をおじいさんにわたし、かわりに豆をもらってポケットにしまいました。

ジャックはもどっていききましたが、たいして遠くまで行かなかったので、日がくれないうちに家に帰りつきました。

お母さんは、

「おや、早かったね、ジャック。め牛が見えないけど、売れたんだね。いくらになったんだい」とききました。ジャックは、

「母さんには、きっとそうどうもつかないよ」といいました。

「まあ、いい子。じゃあ、五ポンド*？ 十ポンド？ 十五ポンド？ まさか、二十ポンド？」

「なんだって」と、お母さんはさげびました。「あんないいめ牛を、こんなつまらない豆ととりかえるなんて。こんな豆、まだからすてやる。ジャック、おまえはベッドへ行っておしまい。今夜はごはんも水もぬぎだよ」

ジャックは、屋根うらの自分の小さな部屋にあがっていきました。お母さんにはしかられるし、ばんごはんぬぎだし、悲しくてたまりませんでした。

でも、しまいに、ねむってしまいました。

つぎの朝、目をさますと、部屋はとつてもへんでした。お日さまはあがっているのに、部屋の中は暗くてかげっています。ジャックはとび起きて服を着、まどまで行ってみました。すると、何があったと思いますか。なんと、きのうお母さんがまどから投げすてた豆がめを出して、大きな木になって、空までとどいていたのです。

豆の木は、まどのすぐそばだったので、ジャックは、まどを開けて木にとびつき、はしごみたいに登っていきました。登って、登って、登って、登って、登って、登って、とうとう空まで行きました。すると目の前に、広くて長い道がまっすぐのびていました。ジャックはその道を歩いていきました。どんどん行くと、とてつもなく大きな家に着き

ました。入り口に大きな女の人がありました。

「おはようございます。おばさん」と、ジャックはいていねいにあいさつしました。「朝ごはんを少しだけませんか」

女の人は、

「朝ごはんだったって？ここにいたら、あんたが朝ごはんになってしまうよ。うちの人は人食い鬼おにで、男の子をやいて食べるのが、何より好きなんだ。すぐに帰ってくるよ」といいました。

ジャックは、ゆうべばんごはんを食べてなかったので、おなかがぺこぺこでした。

「ああ、おねがい、おばさん。なにか食べさせて。きのうの朝ごはんからあと、何も食べてないんです。うえ死にするくらいなら、やかれて食べられたほうがまだよ」

大男のおかみさんは、それほど悪い人ではありませんでした。それで、ジャックを台所に入れて、パンとチーズとミルクをくれました。ところが、半分も食べないうちに、ズシン、ズシン、ズシン、と大きな足音がして、家がぐらぐらゆれだしました。おかみさんは、

「まあ。うちの人が帰ってきたよ。急いでおかまどの中にかくれるんだ」といって、ジャックをかまどにおしこみました。そこへ、大男が入ってきました。

大男はものすごく大きくて、ベルトに子牛を三頭もぶら下げていました。その子牛をテーブルに投げだしていました。

「おい、こいつを朝ごはんにやいてくれ。おや、なんだこのにおいは。

ふん ふん

生きてる人間の血のにおいがする

生きていようが死んでいようが

そいつのほねをくぐらしてパンにのせて食べてやる」

おかみさんは、

「だれもいないよ。おまえさん、ゆめでも見てるんだ。それとも、きのうのばんごはんの男の子のにおいが、のこってるのさ。さあ、手と顔をあらってきれいにしておいで。子牛をやいといたげるから」といいました。

大男が行ってしまうと、ジャックはかまどからとびだして、にげだそうとしました。すると、おかみさんがいいました。

「だめだよ。あの人がねるまで待つんだよ。いつも朝ごはんのあとひとねむりするからね」

さて、大男は朝ごはんを食べおわると、たんすのところへ行つて、金貨きんかのふくろをふたつ取りました。そして、すわつて金貨を数えていましたが、そのうち、いねむりを始め、しまいに家がふるえるほどの大いびきをかきました。

ジャックは、かまどからそつとはいだし、大男のうでの下から金貨のふくろをひとつぬきとつて、豆の木までいちもくさんに走つていきました。そして、金貨のふくろを下に投げ落とすと、ふくろはうちの庭に落ちました。ジャックは、木にとびついて、ずるずるずるすべりおりていきました。やっと家につくと、お母さんに金貨を見せていいました。

「ほら、ぼくのいったとおりだろ。魔法まほうの豆だったのさ」

ふたりはしばらくその金貨でくらしていましたが、そのうち金貨をぜんぶ使つてしまいました。ジャックは、もういちど豆の木を登つていって、運だめしをしてやろうと思ひました。

ある晴れた朝、ジャックは早く起きだして、豆の木を登つていきました。登つて、登つて、登つて、登つて、登つて、登つて、あのだい道にやってきました。歩いていくと大きな家に着きました。入り口におかみさんが立っています。

「おはようございます。おばさん。朝ごはんを少しだけませんか」と、ジャックはいいました。おかみさんは、

「あつちへお行き。あんたが朝ごはんになつてしまふよ。でも、おまえ、前にここに来なかつたかい。あの日、うちの人が金貨のふくろをひとつなくしたんだけど、なにか知らないかい」といいました。ジャックは、

「ふうん、へんだなあ。たぶんぼく、なにか教えてあげられると思うけど、まずなにかひとくち食べなくちゃ」といいました。

おかみさんは、知りたくて、ジャックを中に入れて食べ物をやりました。ところが、ジャックが食べはじめるとすぐ、ズシン、ズシン、ズシンと、大男の足音が聞こえました。おかみさんはジャックをかまどにかくしました。そこへ大男が入つてきていいました。

「ふん ふん

生きてる人間の血のにおいがする

生きていようが死んでいようが

そいつのほねをくだいてパンにのせて食べてやる」

おかみさんは、

「だれもないよ。ゆめでも見てるんだ」といいました。

大男は、朝ごはんに子牛を三頭たいたらげると、おかみさんにいいました。

「おい、おれのめんどりを持ってこい」

おかみさんがめんどりを持ってくると、大男は、めんどりにむかって、

「生め」といいました。すると、めんどりは金のたまごをひとつ生みました。

そのうち、大男は、いねむりを始め、しまいに家がふるえるほどの大いびきをかきだしました。

ジャックは、かまどからそっとはいだし、めんどりをつかんで、戸口に向かって走りまわりました。ところが、そのとき、めんどりが鳴いて、大男が目をさました。ジャックは戸口からとびだしました。

「おい。おれのめんどりはどこだ」と、大男がさげぶのが聞こえました。

「なんだって」と、おかみさんがいっています。

ジャックは、豆の木にとびつくと、ずるずる、ずるずるすべりおりていきました。やっと家に着くと、お母さんにめんどりを見せていきました。

「生め」

めんどりは、ジャックが「生め」というたびに、金のたまごを生みました。

でも、ジャックはまだまんぞくしませんでした。じきに、いちかばちかもういちど豆の木を登っていつてやろうと思いました。

ある晴れた朝、ジャックは早く起きだして、豆の木を登っていきました。登って、登って、登って、登って、登って、登って、てっぺんに着きました。でも、こんどはよく考えて、まっすぐ大男の家には行きませんでした。家の近くまで来ると、しげみのかげにかくれて待っていました。しばらくすると、おかみさんがバケツを持って、水をくみに出てきました。ジャックは、こっそり家の中にしのびこみ、こんどはおなべの中にかくれました。そのとき、ズシン、ズシン、ズシンと足音がして、大男とおかみさんが入ってきました。

「ふん、ふん、生きてる人間の血のにおいがする」と、大男はさげびました。「おい。におうぞ、におうぞ」

おかみさんは、

「ほんとかい。もし、金貨のふくろとめんどりをぬすんだあのいたずらっ子なら、きつとかまどの中だよ」といいました。ふたりはかまどにとんでいきました。けれどもジャックはいません。おかみさんは、

「なんだ。またあんたのあやしい『ふん、ふん』が始まった。きっと、あんたがゆうべつかまえて、けさ朝ごはんにやいた男の子のおいだよ。生きてると死んでるののくべつもつかないなんて、あんたもにぶくなつたもんだね」といいました。

大男は、すわって朝ごはんを食べはじめましたが、ときどき、「やっぱりあやしいぞ」と、ぶつぶついいました。そして立ちあがって、食べ物おき場や、とだなや、そこらじゆうをさがしました。でも、おなべのことは思いつきませんでした。

朝ごはんが終わると、大男は、おかみさんに、

「おい。おれの金のハーブを持ってこい」といいました。おかみさんは、金のハーブを持ってきてテーブルの上におきました。大男が、

「歌え」というと、ハーブは、すばらしく美しい歌を歌いはじめました。金のハーブは歌いつづけ、大男は聞いているうちにねむりこみ、やがてかみなりのような大いびきをかきはじめました。

ジャックは、そうつとおなべのふたを開け、ねずみのようにすべり出しました。そして、テーブルまではって行って、金のハーブをつかむと戸口にむかって走り出しました。ところがそのとき、ハーブがさげびました。

「だんなさま。だんなさま」

たちまち大男は目をさまし、ジャックを見つけて追いかけてきました。

ジャックは走りに走り、大男も走りに走りました。ジャックが豆の木まで来たとき、大男はすぐうしろにせまっていました。とつぜん、大男の目の前で、ジャックのすがたが消えました。大男が道のはしまで行って下を見おろすと、ジャックが死にもぐりいでおりていきます。大男は、

（こんなとこ、とてもおりられない）と思って、立ち止まりました。ジャックはかまわず、ずるずる、ずるずるすべりおりていきました。そのとき、金のハーブが、

「だんなさま。だんなさま」とさげびました。大男は思いきって豆の木にとびつきました。その重みで木がぐらぐらゆれました。ジャックはずるずるすべりおり、大男もずるずるすべりおりてきました。とうとうジャックは、家のすぐそばまでやって来ました。「母さん。おの。おのを持ってきて」と、ジャックはさげびました。お母さんは、おのを持って家からとびだしてきました。そして、ぼう立ちになりました。なんと、雲の中から、大男の大きな足がつかだしているではありませんか。

ジャックは地面にとびおり、おのをひっつかむとひとつ、豆の木に切りつけました。木はぐらぐらゆれました。ジャックはもういちど切りつけました。豆の木はたおれはじめました。とうとう大男は、落っこちて頭がぶつつぶれ、上から豆の木がどしやあつと落ちてきて下じきになってしまいました。

ジャックは、お母さんに金のハープを見せました。そして、みんなにハープを聞かせたり、金のたまごを売ったりして、ふたりは大金持ちになりました。やがて、ジャックはおひめさまとけっこんし、いつまでも幸せにぐらしましたとき。

おしまい。

* ポンド イギリスのお金の単位 たんい

出典 『語りの森昔話集1おんちよろちよろ』村上郁再話

原話 『English Fairy Tales』JOSEPH JACOBS／Dover Publications